

105) 『針別伝奥義之次第』について (誌上発表)

About “Shinbetuden Okuginoshidai”

日本鍼灸研究会 岩田源太郎

Gentaro IWATA

内藤記念くすり博物館所蔵の『針別伝奥義之次第』(函架番号 01578-492.7. 以下『奥義之次第』と略称)は、江戸期の鍼灸書であるが、その内容は知られてない。よって、本書の内容を検討し、江戸期鍼灸研究の一助としたい。

本書は写本で、全 72 葉からなる。題箋には「針伝秘要」とあるが、内題は「針別伝奥義之次第」となっている。序跋はなく、著者、成書年共に不明ではあるが、本書末の識語に「右山田道意、病中執筆。示門人而已、今又是瀉取。寛政九巳孟春。」とあることから、山田道意が執筆した原書を、寛政九年(1797)に転写したものであることがうかがえる。

『奥義之次第』は、大きく前後に大別される。前半は、鍼の手技、主治穴などの臨床に関することが書かれ、後半は「鍼道開目」と題し、臨床に関して配慮すべき事項が述べられている。ただし、前半の最後に「奥伝終」の一行があることから、後半の「鍼道開目」については、のちに原書に追加されたものである可能性も考えられる。

『奥義之次第』の中核を為す「奥伝」の内容は、二つに分けられる。その前半では門人全般に対するものとして、8 項目 74 条にわたって、鍼術の基本と鍼治療における主治穴などが書かれ、これに続く後半は「別伝之事」と題され、上級者向けの内容として、5 項目 133 条にわたって主治穴が述

べられている。なお本書で取り上げられている鍼灸法は鍼法のみで、灸法については一切触れていない。また、経絡についての記載も見られない。加えて、引用文献名も全く見られず、人名については、「鍼道開目」に「黄帝」「岐伯」が見られるのみである。

本書に挙げられている主治穴は 133 穴で、その内訳は、正穴が 50 穴、奇穴など正穴に属さない穴が 83 穴であった。この 83 穴のうちには、通行の経穴書には見る事の無い「七耀」「中順」「野一言」等の穴名が含まれている。取穴法は鼈頭に付されているが、正穴以外のほとんどの穴では、簡単な部位を記すにとどまっている。

主治穴のうち、最も所出回数の多いものは、章門穴の 19 回で、次いで中脘穴の 15 回、足三里穴の 12 回、天枢穴の 9 回と続く。このことから、本書では腹部や体前面の穴を重視していたことがうかがえる。

『奥義之次第』は、100 穴前後の主治穴を症状に対して用いる、通行の経穴書には見られない特異な穴名が散見する、経絡などの理論は用いず、専ら鍼法を重視するなどの特徴から、江戸初期の流派鍼灸書であると考えられる。

この『奥義之次第』が、江戸初期流派のどの系統に属しているか、山田道意の伝などについては、今後の検討課題としたい。